

シヴァ教再認識派写本の欄外註について

川 尻 洋 平

0. カシュミール地方で伝承されてきた写本には、行間や余白に多数の欄外註が残されていることはよく知られている。それらの欄外註が提供する情報は多岐にわたる。そこにはサンスクリット文献の伝承に関わった人々の思考過程の痕跡が残されているだけでなく、本文に対する注釈や本文理解に資する文献からの引用も残されており、写本筆記者が持っていた情報源が示唆されている。また歴史的にも、カシュミールでムスリムによる王朝が成立した 14 世紀以後、シヴァ教文献や伝統がどのような形で存続していたのかを伝えうる貴重な資料でもある。従来の再認識派研究において、欄外註は十分に活用されていたとは言い難いが、近年ウトパラデーヴァの『主宰神の再認識詳注』(*Īśvarapratyabhijñāvivṛti*, 以下 ĪPViv) の断片が回収されることが明らかになり、注目されている¹⁾。本稿は、シヴァ教再認識派写本の欄外註について、これまでの調査結果を報告するものである。

1. はじめに再認識派の典籍について確認しよう。再認識派の創始者はソーマーナダ (Somānanda, ca. 900–950) とみなされているが、「再認識派」という名称は、ウトパラデーヴァ (Utpaladeva, ca. 925–975) の作品に基づく。ウトパラデーヴァは、師であるソーマーナダの『シヴァ・ドリシュティ』(*Śivadr̥ṣṭi*) の内容を反映させる形で、まず『主宰神の再認識偈』(*Īśvarapratyabhijñākārikā*, 以下 ĪPK) と『主宰神の再認識注』(*Īśvarapratyabhijñāvṛtti*, 以下 ĪPVṛ) を同時に著した。後に、ウトパラデーヴァは ĪPViv を著し、それぞれの偈に対して、時に別解釈を与えるなど派生的な議論を展開している。ウトパラデーヴァの孫弟子にあたるアビナヴァグプタは、まず ĪPK に対する注釈として『主宰神の再認識反省的考察』(*Īśvarapratyabhijñāvimarsinī*, 以下 ĪPV) を著した。ウトパラデーヴァが ĪPVṛ において ĪPK の趣旨だけを明らかにし、ĪPK の一語一語を詳細に注釈しなかったためである。アビナヴァグプタは、ĪPV において語源的解釈や派生分析を駆使して詳細に解説している。さらにアビナヴァグプタは、ĪPViv に対しても、『主宰神の再認識詳注

に関する反省的考察』(*Īśvarapratyabhijñāvivṛtivismarśinī*, 以下 ĪPVV) を著している。これらの内、ウトパラデーヴァの ĪPViv だけが完全な形で伝承されていない。ĪPK1.3.6 から ĪPK1.5.4-5 冒頭に対する ĪPViv だけが、Torella によってデリーのナショナルアーカイヴスで発見された唯一の ĪPViv 写本 (No. 30, Śāradā, 紙写本) によって知られている。

2. これら再認識派文献の写本の内、ĪPV 写本の数は、他の再認識派写本の数を圧倒する。管見の限りでも、シャーラダー写本、デーヴァナーガリー写本、マラヤラム写本など 30 を越える ĪPV 写本が現存する。このことは、ĪPV こそが、伝統的にカシュミールだけではなく南インドにおいても再認識派の主要文献とみなされていたことを物語る。

2.1. ĪPV 写本の内、シャーラダー写本を中心におよそ半数の写本に欄外註が与えられている。ĪPV 写本の欄外註の網羅的調査は未だ途上であるが、欄外註は、1) ĪPV に対する注釈、2) ĪPVV や ĪPViv からの引用、3) 指示対象の指示あるいは短い言換え、4) 別の文献からの引用に大別できる。

2.2. Torella (2007, 479, fn. 8) に指摘されているように、ĪPV の刊本に附された注は、校訂に使用された写本の欄外註から採録されたものである。その写本は、Kashmir Series of Texts and Studies の ĪPV 刊本で Gh と言及されており、現在はデリーのナショナルアーカイヴスに保管されている (No. 5, Śāradā, 紙写本)。欄外註を含むシャーラダー写本の内、失われていた ĪPViv の断片をより多く回収できるという点で、ロンドンの School of Oriental and African Studies Library に保存されている写本 (No. 44255, Śāradā, 紙写本) と、シュリナガルの Oriental Research Library に保存されている写本 (No. 838, Śāradā, 紙写本) は注目に値する。校訂に使用された写本とロンドンの写本が、多くの欄外註を共有しているのに対して、上述のシュリナガル写本には独自の ĪPViv 断片が見られ、また他の写本に共通する ĪPViv 断片が見られない場合もあることから、独立した系統に位置づけられる²⁾。ただし、ĪPV 写本全体で見れば、欄外註はしばしば相互に共通している。このことから、欄外註は、早い段階で特定の筆記者によって挿入された後は、以後の筆記者によってほとんど複写されていたと考えられる。

2.3. シャーラダー写本では欄外註も含めて伝承されている一方で、南インドの写本には、これらの欄外註は伝承されていない。南インドに伝承された時点では、欄外註がまだ挿入されていなかった可能性も考えられるが、南インドの写本には伝統的に欄外註はほとんど残されていないことからその可能性は低いだろう。

(234) シヴァ教再認識派写本の欄外註について (川 尻)

3. ĪPV 写本に比べて、ĪPVV の写本はあまり現存しない。筆者が確認したプネの Bhandarkar Oriental Research Institute (No. 464/1875-76, Devanāgarī, 紙写本), チャンデーガルの DAV College (No. 5857, Malayalam, 貝葉写本)³⁾, トリヴァンドラムの Oriental Research Institute and Manuscripts Library (No. 15413B, Malayalam, 貝葉写本) に保管されている ĪPVV 写本には、欄外註が残されていない。また ĪPVV の刊本に、脚註が附されていないことから、刊本に使用された写本にも欄外註がなかった可能性が高い。これらのことから、ĪPVV がそれほど伝統的に学ばれていなかった状況を推測できる。

4. ラクノウの Akhila Bharatiya Sanskrit Parishad に保管されている ĪPK と ĪPV_r の写本 (No. 4408, Devanāgarī, 紙写本) の欄外註にウトパラデーヴァの ĪPViv の断片が豊富に引用されていることは既に報告している⁴⁾。以下に、当該写本の重要な点を述べる。

4.1. 当該写本の、欄外註は、1) ĪPV あるいは ĪPVV からの引用、2) ĪPViv からの引用、3) 指示対象の指示あるいは短い言換え、4) ĪPK と ĪPV_r への注釈、5) 別の文献からの引用に大別できる。興味深いことに、当該写本の欄外註はほぼ ĪPV, ĪPVV, ĪPViv からの引用に限られ、指示対象の指示や短い言換えや ĪPK と ĪPV_r への注釈はほとんど見られない。このことは、筆記者が自身の註を加えることを制限している可能性を示唆する。この点は、再認識派の文献に同定できない欄外註が ĪPViv 断片である可能性を高めている、という意味で重要である。

4.2. また当該写本には、同じ欄外註の繰返しや写本本文である ĪPV_r を誤って行間に挿入している場合が見られる⁵⁾。このことは、当該写本の筆記者が、師の口述を、熟慮することなく、そのまま欄外に書き記した可能性を示唆する。通常、シャーラダー写本は、内容を理解せずに書き写す一般信者や職業筆記者ではなく、複数の写本をもとに校訂する学識あるものによって伝承されてきたと考えられており⁶⁾、このような単純な誤りを繰り返すことは考えにくいからである。一方で、写本伝承の過程において、このような誤りが生じた可能性も排除できない。なぜなら、ĪPV 写本の伝承が示しているように、写本筆記者は欄外註をも含めてそのまま複製している場合が多く、そのような筆記者は内容を理解していないために、同じ欄外註を繰返し書写したとも考えられるからである。あるいは、欄外註を挿入した筆記者から当該のデーヴァナーガリー写本までの間に複数の筆記者が介在した可能性もあろう。いずれにせよ、当該写本には、シャーラダー写本間の伝承中、あるいはシャーラダー写本からデーヴァナーガリー写本に転写する際に起

こる誤りを含んでいることから⁷⁾、シャーラダー写本がすでにこのような欄外註を含んでいたことは間違いない。

4.3. それでは、いつこれらの欄外註が残されたのであろうか。ĪPV_rを完全な形で伝える写本は、現在トリヴァンドラムの Oriental Research Institute and Manuscripts Library (No. 8900A, Malayalam, 貝葉写本)に残されているものだけである。Torella (2002, XLVI-XLIX)によれば、その写本のオリジナルは、おそらく一元論的シヴァ教であるトリカが南インドへと拡大した12, 13世紀頃にカシュミールからケーララ地方へ伝承された。一方、当該の写本も含めて北インドに伝承されたĪPV_r写本群は、ĪPK3.2.9の途中以降が消失している点で共通している。このことから、それらの共通の祖が想定される。そしてそれは、おそらく13, 14世紀頃のムスリムの侵入にも関わらず残存した唯一の写本であろう、とTorella (2002, XLVI-XLIX)に述べられている。

その写本に既に欄外註があったか否かいずれの可能性も考えられる。しかし、たとえ既に欄外註があったとしても、ĪPK3.2.9の途中以降には欄外註がほとんど見られず、ĪPK3.2.9以降にある僅かな欄外註もĪPV_rに対するものではないことから、欄外註が挿入されたのはĪPV_rの消失以後と考えられる。ĪPV_r消失以前に欄外註が挿入されていたとすれば、ĪPK3.2.9の途中以降にも、ĪPV_rに対する欄外註が残されていたはずである。またĪPK3.1.6を最後にĪPV_{iv}の断片が見られないことは⁸⁾、欄外註が挿入された段階で、ĪPV_{iv}の全体が既に失われていた、あるいは少なくとも欄外註を残した筆記者にはĪPV_{iv}の一部しか伝承されていなかった可能性を示している。完全な形のĪPV_rが南へ伝承された時期を考慮すれば、ĪPV_rの一部消失は、ムスリムの侵入の時期に起こったと考えられよう。以上より、これらの欄外註は、13, 14世紀以後に挿入された可能性が高い。

バースカラカンタ (17世紀あるいは18世紀)⁹⁾が、ĪPVに対する注『バースカリー』(Bhāskari)の中で、ĪPV_{iv}の本文を引用していない点にも注目すべきである。バースカラカンタがĪPV_{iv}の本文について知っていたかどうか確かではないが、少なくともĪPVVの本文を知らなかった可能性は高い。というのも、バースカラカンタは、アビナヴァグプタがĪPVVをĪPVよりも先に著したと述べているが¹⁰⁾、実際には、アビナヴァグプタは、ĪPVVにおいてĪPVに言及しているからである¹¹⁾。もしĪPV_{iv}のテキストについても、バースカラカンタがその情報を持っていなかったとすれば、当該写本のĪPV_{iv}断片を含む欄外註は、バースカラカンタよりも以前に、すなわち、17, 18世紀よりも前に挿入されたと考えられる。

(236)

シヴァ教再認識派写本の欄外註について (川 尻)

4.4. 欄外註を有する ĪPV 写本群が、多くの欄外註や ĪPViv 断片を共有しており、欄外註についても共通の祖が想定されるのに対して、当該写本は、ĪPViv 断片に関して、独立した情報源を持っている。Ratié (forthcoming a) が回収した ĪPViv1.5.4-5 の断片は、当該写本には見られないからである。当該写本は ĪPV_r の写本であるから、ĪPV 写本の欄外註に含まれる ĪPViv 断片と共通しないことは不自然ではない。しかし、これまでに筆者が再認識派写本を校合した限りでは、当該写本と欄外註を共有する写本はない¹²⁾。

5. 以上、再認識派写本の欄外註を検討したが、ĪPViv は、欄外註が挿入された時点で、大部分が散逸していたと考えられる。そして ĪPViv 全体が失われていたとしても、ごく一部は唯一の ĪPViv 写本によって伝えられ、それ以外の断片も師資相承の伝統の中では傳承されていた。しかし断片的に傳承されていた ĪPViv もバースカラカンタの時代までには失われたと考えられる。ここに再認識派の伝統がカシュミールで衰えていく姿を見ることもできよう。

本稿で使用了した写本の使用および複写の許可をいただいた各関係機関には、ここに記して謝意を表したい。

- 1) 例えば、Ratié, forthcoming a, b や Kawajiri, forthcoming a, b を参照されたい。 2) Ratié, forthcoming a 参照。 3) この写本はかつてホシアルプールの Vishveshvaranand Vedic Research Institute に保管されていたものが、移されたものである。 4) 川尻 2015 を参照されたい。 5) 当該写本の 2r, 10v, 11r, 18r に同一の欄外註が繰返されている。 6) Torella 2002, XLVI 参照。 7) 例えば、シャーラダー文字で cca と śca の混同が見られる。 8) ĪPViv 断片が回収できる偈は次のとおりである。ĪPK1.2.4, 1.2.6-8, 1.3.5-7, 1.4.1-8, 1.5.1-12, 1.5.17-18, 1.6.7-11, 1.7.1-6, 1.7.8-10, 1.8.11, 2.1.1-7, 2.2.1-5, 2.3.1-8, 2.4.8-9, 3.1.1, 3.1.3-6。 9) 1960 年代にバースカラカンタの子孫が、バースカラカンタを彼らの 6 世代前の人物であると報告していることに基づいて、これまで 18 世紀頃とされていたが、Sanderson (2007, 422) は 17 世紀後半頃に活動していた可能性に言及している。 10) See Bh I, p. 3. 11) See ĪPVV III, p. 230. 12) ジャンムーの Rashtriya Sanskrit Sansthan に保管されている ĪPK と ĪPV_r の写本 (No. 53) は、ĪPV 写本と共通しない欄外註を含むが、それらはすべて、ĪPV と ĪPVV の各日課の冒頭にある偈からの引用である。

〈略号表〉

- Bh *Bhāskarī* by Bhāskarakaṇṭha. In *Īśvarapratyabhijñāvimarśinī of Abhinavagupta*. Ed. K. A. Subramania Iyer and K. C. Pandey. 2 vols. Delhi: Motilal Banarsidass, 1986.
- ĪPK *Īśvarapratyabhijñārikā* by Utpaladeva. See Torella 2002.
- ĪPV_r *Īśvarapratyabhijñāvṛtti* by Utpaladeva. See Torella 2002.

ĪPViv *Īśvarapratyabhijñāvivṛti* by Utpaladeva. See Torella 2007.

ĪPV *Īśvarapratyabhijñāvimarsinī* by Abhinavagupta. *The Īśvarapratyabhijñāvimarsinī of Utpaladeva, with Commentary by Abhinavagupta*. Ed. Mukund Rām Shastri. 2 vols. KSTS 22, 33. Bombay: Nirnaya Sagar Press, 1918–1921.

ĪPVV *Īśvarapratyabhijñāvivṛtivismarsinī* by Abhinavagupta. *The Īśvarapratyabhijñāvivṛtivismarsinī by Abhinavagupta*. Ed. Madhusudan Kaul Shastri. 3 vols. KSTS 60, 62, 65. Bombay: Nirnaya Sagar Press, 1938–1943.

KSTS Kashmir Series of Texts and Studies.

〈参考文献〉

川尻洋平 2015 「シヴァ教再認識派写本の伝承について」『人間文化研究所年報』（筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所）26: 179–188.

Kawajiri, Yohei. Forthcoming a. “New Fragments of the *Īśvarapratyabhijñā-vivṛti*.” In *Utpaladeva: Philosopher of Recognition*, ed. B. Bäumer and R. Torella. Delhi: DK Printworld.

———. Forthcoming b. “New Fragments of the *Īśvarapratyabhijñā-vivṛti* (2).” In *Proceedings of Japan-Austria International Symposium on Transmission and Tradition: The Meaning and the Role of “Fragments” in Indian Philosophy, Matsumoto, August 20–24, 2012*, ed. E. Prets and H. Marui.

Ratié, Isabelle. Forthcoming a. “Some Hitherto Unknown Fragments of Utpaladeva’s *Vivṛti* (I): On the Buddhist Controversy over the Existence of Other Conscious Streams.” In *Utpaladeva: Philosopher of Recognition*, ed. R. Torella and B. Bäumer. Delhi: DK Printworld.

———. Forthcoming b. “Some Hitherto Unknown Fragments of Utpaladeva’s *Vivṛti* (II): Against the Existence of External Objects.” In *Mélanges tantriques à la mémoire de N. Ramacandra Bhatt*, ed. D. Goodall and P. S. Filliozat.

Sanderson, Alexis. 2007. “The Śaiva Exegesis of Kashmir.” In *Mélanges tantriques à la mémoire d’Hélène Brunner*, ed. D. Goodall and A. Padoux, 231–442 and 551–582. Pondicherry: Institut Français de Pondichéry / Ecole Française d’Extrême-Orient.

Torella, Raffaele. 2002. *The Īśvarapratyabhijñākārikā of Utpaladeva with the Author’s Vṛtti: Critical Edition and Annotated Translation*. Delhi: Motilal Banarsidass.

———. 2007. “Studies on Utpaladeva’s *Īśvarapratyabhijñā-vṛtti*: Part III, Can a Cognition Become the Object of Another Cognition?” In *Mélanges tantriques à la mémoire d’Hélène Brunner*, ed. D. Goodall and A. Padoux, 475–484. Pondicherry: Institut Français de Pondichéry / Ecole Française d’Extrême-Orient.

(本稿は、平成 26 年度科学研究費補助金 [研究活動スタート支援] (研究代表者：川尻洋平，課題番号 25884089) による成果の一部である。)

〈キーワード〉 再認識派, *Īśvarapratyabhijñāvivṛti*, ウトパラデーヴァ, 欄外註
(筑紫女学園大学人間文化研究所リサーチアソシエイト, 博士 (文学))